市民フォト

ふくしま夢通信

No.21・2015年 冬号

特集 人々の思いがつなぐ重厚華麗な「踊屋台」50年ぶりに復活!

修復作業を終え半世紀ぶりに蘇った福島市唯一の「踊屋台」が、平成26年11月24日、晩秋の福島市街地を記念巡行しました。「ヤーレ、ヤレヤレ」の元気な掛け声とともに引き手を務めたのは、公募で集まった市内の小学校22校の児童約100人です。踊屋台一階のお囃子舞台には、小太鼓と大太鼓を乗せ、子どもたちがお囃子を奏で、二階の踊舞台では、伝統文化の継承に取り組んでいる「伝統文化みらい協会」の子どもたちが大人顔負けの舞を披露しました。

貴重な文化財を譲り受け、地域振興と復興のシンボルとして保存し、活用して行こうと市民有志が立ち上げた特定非営利活動法人福島踊屋台伝承会（以下、伝承会）の理事、髙倉秀一さんに復活に込めた願い、秘話などを伺いました。

◀1階が鼓を乗せるお囃子の舞台。2階は踊舞台。三方に竹の御簾が付いている

特定非営利活動法人
福島踊屋台伝承会 理事
髙倉 秀一さん

総ケヤキ造り。金箔を使った彫刻など重厚華麗な踊屋台

約50年ぶりに蘇った踊屋台は、高さ4.5メートル、幅3.5メートル、奥行き3.6メートルの二階建て。総ケヤキ造りで、社寺仏閣に用いられることが多いという唐破風※には、金箔を使った龍や鳳凰の彫刻が施されています。地元の宮大工、八木澤規矩夫さんが一年余りの歳月をかけた大型の踊屋台が完成したのは昭和31年のこと。それから10年ほど活躍した後、子どもたちの減少などによって引退。その後、現在まで保管されていました。

復活のきっかけは、「元気なふるさと福島をつくるために活用できないか」という所有者からの相談でした。子どもの頃、祭りで踊屋台に親しんだ髙倉さんは「大切に保管されていた踊屋台を見たときは、当時のことが思い出されて胸が熱くなりました。同時にこれから子どもたちが屋台を引き回す姿、それを眺めて元気をもらうお年寄りの姿が浮かびました」と話します。

※唐破風…中央は弓形で左右両端が反りかえった破風（屋根に施された装飾）。

▲踊屋台は昭和30年代前半から40年代前半にかけて市内を巡行

「このくらい残せないでどうする!!福島」を合言葉に市民有志が尽力

平成24年から関係者で検討を重ね翌年3月、市民有志で保存・活用のための準備委員会を立ち上げました。屋台の現状調査や、他県の屋台保管施設の見学や修復の依頼など、復活に向けての準備が始まりました。長く保存・管理していくためには新たな組織が必要と、平成26年には特定非営利活動法人を設立。「このくらい残せないでどうする!!福島」を合言葉に、まずは屋台を蘇らせることを目標に尽力してきました。

「市内で唯一現存している踊屋台を活用できるように修復し、街なかを巡行するなど活用を図り、そして将来に伝承するためには、かなりの費用がかかります。大事なのは、市民のみなさんが一緒にこの踊屋台を未来へ継承していく心だと思うんです」

記念巡行で披露された大人顔負けの舞

▲お囃子を奏でる子どもたち

先代の生き様を映す踊屋台
職人魂と復興の祈りを込めて修復

父からよく聞かされていた伝説の踊屋台

工匠店「八木沢」 社長
八木澤（やぎさわ） 純子（すみこ）さん

踊屋台の修復作業を担ったのは、福島市内の工匠店「八木沢」です。七代目社長、八木澤純子さんは「50年前に曾祖父、祖父、父と三代で関わった踊屋台に関われる私は幸せ者です」と話します。八木澤さんが踊屋台を初めて見たのは、今から9年前。「子どもの頃から父に『すごいのがあるんだ』と聞かされていた私にとっては伝説の屋台でした。大店（おおだな）の旦那衆から福島一の屋台にしてほしいとお願いされて設計図より大きい屋台にした事や、ほぼケヤキを使い、曲りや反りをなくすために苦労した事。また、曾祖父が描いた虎や龍の下絵があまりに見事で彫刻の発注先から戻ってこなかった事など、一目見て父から聞かされていた全ての事が腑に落ちました」。踊屋台は、日本の高度成長を背景に、木材選びの目利きと匠の技、そして大店の旦那さまたちと巡り合ったご縁があって生まれたものだったのです。

目指したのは50年の時を経た今の雰囲気を壊さない修復

▲踊屋台を作成する八木澤規矩夫さん

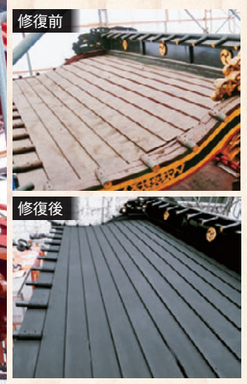
修復は、昨年9月から始まりました。完成後50年以上も経過しており巡行できるように修復する作業は大変でした。車輪が傷んでいたら動かせないので修理はできないと思っていたそうですが杞憂（きゆう）でした。「作業を始める前に私たちがイメージしたのは、完成から50年の時を経た今の雰囲気を壊さないような修復でした。細部まで手を掛けてしまうと、時の移ろいが分からなくなってしまうでしょう」。一番手が掛かったのがケレン作業でした。塗装の良し悪しや仕上がりの美しさを左右する大事な作業なので仮小屋の中でひたすら続けたそうです。「塗りは、カシュー[※2]。2度塗りして仕上げました」。親子四代でつないだ思いと職人魂が、踊屋台の復活に結び付きました。

※1 ケレン作業…剥れかかった塗膜（とまく）や付着物の除去、錆落としなどの作業のこと。下地調整処理。
※2 カシュー……漆に似た、樹脂系の塗料。

鳳凰と龍

▲踊屋台に使われている彫り物の下絵は、全て故・八木澤代作さんの手によるもの。唐破風（からはふ）の前には、鳳凰と龍

工匠店「八木沢」の社長を務める八木澤純子さんの曾祖父・故代作さんが下絵構想を描き、祖父・故作治さんが棟梁を務め、父・規矩夫（きくお）さんが製作し完成させた。現存している踊屋台は少なく稀少価値が高い



修復前

修復後

▲屋台に使われている「赤」は、御霊を払うための色。決して派手に仕上げるために用いた色ではない

踊屋台を通し楽しい思い出を多くの子どもたちに届けたい

祭り本来の意味や魅力を伝えようと記念講演も開催

さらに伝承会では、祭りの意味や魅力を伝える役目も担おうと記念巡行に先駆け記念講演も開催。講師の懸田弘訓（かけたひろのり）さん（福島市文化財保護審議会長）が語る祭りの起源、子どもが屋台で踊る意味は、実に興味深いものでした。屋台の飾り物の一つ山鉾（ほこ）は、亡くなった方々の御霊[※1]（みたまし）の依り代[※2]（よりしろ）。囃子をにぎやかにするほど御霊が依（よ）り付くと考えられていたのだそう。「慰めて鎮めて帰っていただき平癒（へいゆ）を祈るのが祭りの原点。その昔、7歳までは神の子と言われていた子どもも依り代でした。舞うことで御霊を鎮め平穏を祈るのが踊屋台だったんですね」という懸田さんの講演に、高倉さんをはじめ伝承会の皆さんも、あらためて踊屋台について理解を深めたそうです。

求む祭り好き! オール福島で継承

伝承会では、未来を担う子ども達に活用してもらい、街の活性化につなげていきたいと願っています。「自分の町に誇れるものがあり、それにまつわる思い出がたくさんあれば、市外に出たとしても折りに触れて帰ってこられます」と高倉さん。

踊屋台は、伝承会が管理するのでオール福島で関われます。「地縁、血縁不問。祭り好きが集まって一緒に取り組めるところが魅力です。記念巡行の時も約100人の子どもたちが引く踊屋台は元気な掛け声と笑顔であふれ、見守る沿道の皆さんも笑顔で応えていました。これこそ踊屋台が持っている力ですよね」とさらに高倉さんは話してくれました。

たくさんの奇跡を集めて受け継がれる踊屋台には力が宿ります。そのパワーが復興への力になります。

▲引き手は公募で集まった児童約100人

福島踊屋台伝承館（保管庫）を建設中です。協賛をいただける方は、こちらまでご連絡ください。
■問／NPO法人福島踊屋台伝承会（福島市観光開発株式会社内）
☎024-521-2552
福島踊屋台 検索

※1 御霊……この場合、怨みなど心残りがある霊。諸悪（災害や疫病など）の根源とされていた。
※2 依り代…神霊が依り憑く対象物。

シリーズ ふくしまの魅力人（みりょくびと） インタビュー

◉第七回インタビュー

ふんわり心に降り積もる昔話で福島の魅力を伝える

「ふくしま民話茶屋の会」（以下、民話茶屋の会）は、平成13年に開催されたうつくしま未来博のパビリオンの一つ「からくり民話茶屋」での語りをきっかけに生まれた会です。結成以来10年以上、福島市内各地に伝わる民話と方言を通し、故郷の歴史や魅力と現代に生きる知恵を伝えたいと精力的に活動してこられました。その活動は、定期口演（P7左下参照）をはじめ学習会、民話集の出版、他県の民話の会との交流など多岐にわたります。口承文学の筆頭として挙げられる昔話は、「口や目で語り、耳や目で確かめるのが一番」と話す民話茶屋の会、会長の渡部八重子さんに語り部になった経緯や昔話の魅力について伺いました。

ふくしま民話茶屋の会　会長　渡部（わたなべ） 八重子（やえこ） さん

Yaeko Watanabe **PROFILE**

昭和11年、河沼郡湯川村（旧勝常村）生まれ。昭和32年、大和農芸家政短期大学（現 大和学園聖セシリア女子短期大学）卒業。同年から平成8年までJA福島中央会に勤務。その後、ふくしま市女性団体連絡協議会の3代目会長を務める。平成13年に開催された「うつくしま未来博」では、語り部として「からくり民話茶屋」のステージに立つ。平成14年1月、福島市を中心に有志で「ふくしま民話茶屋の会」（現在28人）を組織。以後、定期口演、学習会、交流会など精力的に活動を続けている。並行して、平成13年、福島市観光課が募集した作文集に感銘を受け「花見山案内実行委員会」を立ち上げ、ふくしま花案内人活動にも取り組んでいる。

子ども時代の楽しみはおばあさんが語る昔話

河沼郡湯川村の勝常寺の近くで生まれ育った渡部八重子さんは、「ざっと昔…あったと」から始まるおばあさんの昔話が大好きな子どもでした。寝る前はもちろん、竈（かまど）に藁（わら）をくべてご飯を炊くおばあさんの隣にしゃがんでは「ばあちゃん、ざっと昔、ざっと昔」と、せがんだそうです。昔話は、語る人によって多少アレンジが加わります。「ばあちゃんの話は、いつも肯定的。『うりこひめとあまのじゃく』※のあまのじゃくもうりこ姫を殺さなかった。どれも生かすように語っていました」。夜は、その優しさの中でスウっと眠りに落ちていくのが常だったと言います。

市政100周年の記念に市内の民話100話を選定

そんな渡部さんですから「うつくしま未来博」だけで「からくり民話茶屋」の活動を閉じてしまうのは、忍びないことでした。賛同者を得て民話茶屋の会を立ち上げると、精力的に活動してきました。その最たるものが平成19年の市政100周年記念事業でした。「会員たちが協力し合い福島市内の民話を100話選定し、民話マップや民話集も作りました。大変でしたが、どれも会員の血肉になりました」。また、コラッセの定期口演で互いの語りを聞くことは、聞き手にどう伝えるかという勉強になりました。「昔のように話すだけで情景が見えてくる環境ではないですから。ゆるい縁（囲炉裏縁）とか茅葺（かやぶ）き屋根の煙出しとか、昔の暮らしをどう描写するか。仲間の語りを聞きながら研究したんです」

▲市制100周年記念事業の一つ。「100回の出前語り」

語りながら昔話に自分を重ね生き方を教わる

昔話の魅力を渡部さんは、話の中に宿る人の生き様と知恵だと語ります。「『伝承話』は、まさにそれ。動物に姿を変えて語ることで本人の気付きを促すのは『おとぎ話』。今も変わらない嫁と姑の『世間話』。私は、語る度に昔話に自分を重ね生き方を教わってきたように思います」

ちなみに福島市のシンボル信夫山も民話の宝庫です。「信夫山を追い出されたという『石ケ森の加茂左衛門ぎつね』はもともとは人間だったキツネ。だからあんまり人をだませない。なんでキツネになったのかは、口演に来られた時のお楽しみにしておきましょう（笑）」。ふんわり心に降り積もる渡部さんの語り。

福島の民話を聞きに足を運んでみませんか。軽妙な語りに笑いころげ、オチに納得し、元気をもらえると思います。

▶民話に登場する「種まきうさぎ」。春になると、吾妻山の山肌にうさぎの雪形が現れる

▲「ふくしまの民話」福島市の全地区から選定した民話100話の中から、第一集、第二集を作成

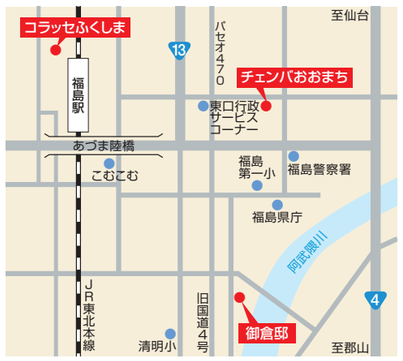
▲民話の宝庫 信夫山

▲福島市民家園（渡辺家）で来園者に昔話を語る渡部さん

定期的に行っている常設口演

- ●コラッセふくしま…毎週日曜日　午後1時30分～3時（12階展望ラウンジ）
- ●御倉邸……毎月第3日曜日　午前10時30分～午後3時
- ●チェンバおおまち…偶数月の第3土曜日　午後1時30分～

※曜日・時間は都合により変更になることがあります。



十七地区に伝わる主な民話

- ●大徳坊（中央地区）
- ●安寿と厨子王（すしおう）（渡利地区）
- ●白菊童子（杉妻地区）
- ●一盃森の長次郎狐（清水地区）
- ●もちずり石（東部地区）
- ●耳取川（北信地区）
- ●片目清水（信陵地区）
- ●雨地蔵（吉井田地区）
- ●大竹地蔵尊（西地区）
- ●鹿女房（土湯温泉地区）
- ●乞食坊主と円寺（立子山地区）
- ●吾妻の種まき兎（蓬莱地区）
- ●乙和の椿（飯坂地区）
- ●蓮泉寺（れんせんじ）のトラ猫（松川地区）
- ●炭焼き藤太（とうた）（信夫地区）
- ●王老杉（おろすぎ）ものがたり（吾妻地区）
- ●刺抜地蔵（飯野地区）

※「うりこひめとあまのじゃく」…瓜から生まれた瓜子姫の嫁入りを妨げた妖怪・天邪鬼が退治される昔話。話の展開や結末は地域により諸説ある。

入賞作品決定!

ふくしまスイーツコンテスト2014

福島市産の「リンゴ」を使用したスイーツを広く募集した「ふくしまスイーツコンテスト2014」。164作品の応募がありました。平成26年11月29日に最終審査が行われ、中村勝宏さん（日本ホテル㈱統括名誉総料理長）をはじめ、8人のシェフ・パティシエと市民3人（公募）の審査により、各賞が決定しました。

～ふくしまの新しいご当地スイーツが誕生しました～

プロ部門

グランプリ

作品名／La fuite du temps（移ろい）
制作者／大泉 千尋さん（ホテルメトロポリタン仙台／宮城県仙台市）

<作品紹介>
紅玉とふじ、2種のリンゴの味わいが引き立つよう工夫しました。カトルエピスとカラメルで大人な味わいに仕上げました。リンゴプレザーブを味わいのアクセントにしました。

準グランプリ
作品名／林檎のスパークリングヴェリーヌ
制作者／味戸 清晃（きよてる）さん（エルティフードサービス／福島市）

金　賞
作品名／キャラメル風味のアップルスフレ
制作者／村松 康伸さん（郡山ビューホテル／郡山市）

市民賞
作品名／クレーム　ポンム
制作者／寺山 つかささん（ホテルハマツ／郡山市）

一般・学生部門

グランプリ

作品名／お花畑のほほ笑みリンゴタルト
制作者／根本 由希子さん（一般／郡山市）

<作品紹介>
福島市の花見山、菜の花畑、梨園のバラ畑などのお花畑の美しさを真っ赤なリンゴと黄色のサツマイモで再現しました。みんなで分け合えば、優しい甘さにほほ笑みが広がるタルトです。

準グランプリ
作品名／黄色のしあわせりんごパイ
制作者／大竹 茉央（まお）さん（福島東稜高等学校3年生／福島市）

金　賞
作品名／ふわっとろっシャキっとリンゴのベニエ
制作者／茂呂 夏子さん（国際テクニカル調理師専門学校2年生／栃木県栃木市）

アイデア賞
作品名／3種リンゴコンポートのクッキーサンドふわふわムースと共に
制作者／丹野 恵子さん（一般／福島市）

入賞作品は協力店舗を募り、福島市内の飲食店・菓子店などで提供・販売する予定です。
市ホームページで入賞作品を紹介しています。ぜひご覧ください。
平成27年度は「モモ」をテーマにしたスイーツコンテストを予定しています。お楽しみに。

【問い合わせ】農業振興課 ☎024-525-3727　URL http://www.city.fukushima.fukushima.jp/

CONTENTS

2 特集
人々の思いがつなぐ重厚華麗な「踊屋台」50年ぶりに復活!

6 シリーズ
ふくしまの魅力人 ―第7回―
ふくしま民話茶屋の会
会長 渡部（わたなべ） 八重子（やえこ）さん

8 インフォメーション
●ふくしまスイーツコンテスト2014　入賞作品決定!

表紙紹介

「踊屋台に希望を乗せて」

表紙説明：
約50年ぶりに復活を果たした踊屋台には、たくさんの人々の思いが詰まっています。復興の希望を乗せて、福島市内で開催の各種イベントなどでも活躍します（関連記事P２～５）。

市民フォト・ふくしま夢通信
平成27年２月１日 発行　No.21　2015年 冬号
http://www.city.fukushima.fukushima.jp/

編集・発行 福島市役所 広報広聴課
〒960-8601 福島市五老内町3-1
☎024-525-3710　FAX024-536-9828
E-mail : kouhou@mail.city.fukushima.fukushima.jp

ホームページもご覧ください　福島市　検索　クリック
YouTube（ユー・チューブ）チャンネル ふくしまチャンネル
twitter（ツイッター）アカウント fukushimacity
Facebook（フェイスブック）アカウント 福島市